

【翻 訳】

E・B・ブラウニング作

『ポルトガル人からのソネット』

I

野 口 忠 男

かつて私はセイオクリタスが、あの楽しい年月、心から待ち望む年月、
すべての者に、年老いた者にも若い者にも、
恵み深い手に贈物をたずさえて現われる年月について、
いかに歌っていたのか考えたことがあるのです。
彼の古い言葉で歌われた このことをじつと考えていると、
溢れる涙を透して、少しづつ作られる幻影の中に、
楽しく悲しい年月、憂うつな年月、私の人生のこれらの年月が、
かわるがわる現われては、心に暗影を落としていたのです。
すぐに私はわかったのです、こうして泣き濡れていると、
不思議な姿をしたものが、背後で動き

髪をつかんでうしろへ引き寄せたのです。

そこでもがいていると、ある声が勝ち誇った調子で言ったのです——

「今おまえを捕えている者は誰だと思うか?」「死です。」と答えたのです。しかし、そこで銀鈴のような声が響き渡ったのです。「死ではなく、愛」と。

II

しかし、神が治める全宇宙の中で、たつた三人だけが、

あなたの語ったこの言葉を聞いたのです。——

神ご自身、ほかに話していたあなたと

じつと聞いていた私!そして私達のうちの一人が答えたのです……

その方は神でした……神は罰として、あなたの姿を見えなくする為に、

私のまぶたにとても暗い呪いをかけられたのです——

そこで、かりに私が死んでしまっていたら、まぶたに置かれた死の重みも、

あなたを排した意味を、まったくなくしたことでしよう。

「いけない」と神から禁じられることは、他のものからされるよりも悪いことなのです。

ああ、私の友よ! 世間の噂で二人の仲を引き裂くことも、

海が私達の心を変えることも、嵐が二人の思いを曲げることも出来ません。

二人で手を取り合って、山の様な多くの障害に立ち向って行きましょう。

すると、ついに天国が二人の間にめぐって来て、

私達は星に変わらぬ愛の誓いをたてるだけなのです。

III

似つかわしくない私達、似つかわしくないのです。

ああ、王子のような気高いころ！

二人の習慣と運命は、同じではないのです。

私達の守護天使が二人、通りすがりに翼を斜めに羽ばたかせ、互いに顔を見合わせながら驚きの表情をしています。考えて見て下さい、

あなたは女王たちに招かれて、はなやかな社交界に臨み

涙で光る私の目よりも、まぶしく輝く多くの視線を浴びて、

音楽家の主役を演じる方なのです。

あなたが格子窓からもれる明りで

夜通し歌い、糸杉にもたれかかる

あわれな、疲れはてた、さ迷える歌い手の私を

見つめるのはどんなつもりなのですか。

聖油はあなたの頭に注がれ——私の頭には露が注がれるのです。——

そして死の神が、これらの露に相応しい場所を、掘っているのにちがいないのです。

IV

あなたは素晴らしい宮殿の間に招かれる人なのです、

崇高な詩を歌うまことに貴い方！

その場に集う踊り子たちは、舞踏の足を止め

多くの詩歌を聞くために、あなたの豊かな言葉の溢れ出る口もとを

じつと見つめることでしよう。あなたの手には、あまりに粗末なこの家の

掛金をはずすことが出来るでしようか。そしてあなたの歌を、

光り輝く黄金で幾重にも包み、私の戸口にこっそり置いて行けるでしようか。

目を上げて、あの壊れた開き窓を見て下さい、

屋根裏にはこうもりやふくろうの子供の建築家！

私のコウロギは、あなたのマンドリンと競って鳴いています。

静かに、さらに悲しみを増すことになるから、かき鳴らさないで下さい！

泣き濡れている声が、心の底で聞こえます。……

あなたが歌わなければならない時には、……

一人遠く離れたところで歌って下さい。

V

私はゆっくりと重い心をもたげるのです、

昔エレクトラが、骨壺を持ち上げたように。

そして、あなたの目を見詰めながら、あなたの足もとに灰をぶちまけるのです。

よく見て下さい、なんと大きな山のような悲しみが

私の心の中に秘められ、赤く狂おしい火の粉が

灰色の薄暗がりの中で、わずかにくすぶっているのを。

仮にあなたが軽蔑して、火の粉を踏みつぶし、真暗闇になったとしても、おそらくそれでいいのかもしれない。しかし、それとは別に

あなたが私の側にいてくれて、灰色の塵が風に吹かれて燃え上がるのを待っていてくれるなら、……最愛の人よ、

あなたの頭上の月桂樹の冠も、あなたをさ程守ってはくれないでしょう。

ですから、燃えるすべての火でもって、冠の下の髪を焦がしたり

こなごなにさせたくはないのです。

もつと遠くへ立ち去って下さい、去って下さい。

VI

私のもとから立ち去って下さい。でもこれからは

あなたに守られていくような気がするのです。

ただ一人人生の戸口に立ち

あれこれ心をくだくことはもうしないし、

昔のように陽光のもとで、静かに手をのべることもしないでしよう

私がこらえてきたあの感触——

手のひらにあなたが触れることがないとしても。

たとえこの広い大地に、

私達二人の仲を引き離す運命があっても

あなたの心は、私の心の中で激しく鼓動しているのです。
ぶどう酒を飲めばぶどうの味がするように、
私の行うことも私の夢見ることも、あなたと一緒になのです。
私が一人で神に祈る時、神はあなたの名前を聞いておられ、
私の目の中で、二人の涙が光っているのを見ておられるのです。

VII

全世界の表が変わったように思えるのです。
あなたの魂の足音が、私のもとへそつと、ああ、そつと
私とはつきり見える死の恐ろしい縁の間を、大腿で歩いて、
近づいて来るのを聞いた時から。その中に沈んで行く様に思われた私は
愛にまで引き上げられ、生の全てを
新しいリズムの中で教えられたのです。
神は洗礼のために、一杯の施しを与えられたのです。
私はその杯を喜んで飲み乾し、愛する人よ、
側にいるあなたとともに、その美味を称えるのです。
この世と天国の名前も、近くにあるいは遠くに、あなたがいてくれるし、
これからもいてもらえるために、一変してしまつたのです。
この……このリ्यूートと歌は……今まで愛され、
(歌っている天使達は知っているのです)とても勝れたものなのです。

なぜなら あなたの名前が、天使たちの話す言葉の中で正しく語られているからです。

VIII

私には何をお返しすることが出来るかしら、
ああ、寛大で惜しみなく与えてくださる方、

あなたは、金色と紫色の純粹で計り知れない心をもたらし、
壁の外に贈り物を置いて下ださるのです、

思いもよらない身にあまる贈り物を受けても

受け取ったり捨てたりする、私のようにつまらない者のために。

私は冷たく恩知らずなかしら、

この上ない高価な贈り物を沢山いただいても、何一つお返し出来なくて？

そうではないの、冷たいわけではないのです——

それよりもとても卑しい者なのです。

存じておられる神に尋ねてみて下さい。たびたび流す涙のために、

私の人生から美しい姿は消え、後にとても重苦しく生気のないものが残っているのです、

あなたの頭に枕のような憩いを、上手に与えることはできないでしょう。

私のもとから立去って下さい！ 踏み付けてしまうことになるでしょう。

IX

私に与えられるものを与えることは、一体正しいことかしら？
私と同じつらい涙がこぼれ落ちる下に、あなたを座らせ、
あなたのあらゆる懇願に、生気のない微笑みを時たま浮べて、
悲しみの年月が、私の固く閉じた口もとで再三溜息をつくの
をおお、不安よ、これはとても正しいことではないのです！
私たちは同じ身ではなく、恋人になるには相応しくないので
私のようにこんなひどい贈り物を送る者は、
卑劣な人間と思われるし、

そうであるに違いないことくらいわかっているのです、
でも悲しいのです。ああ、出て行って下さい。

私の塵であなたの高貴さを汚したくはないの、
あなたのベニスグラスに、私の毒を吹きかけたくはないの、
あなたにどんな愛も与えたくはないのです——こうすることは良くないこと。
最愛の人よ、私はあなたを愛しています！そのまま立ち去って下さい。

X

でも、愛、純粋な愛は、本当に美しく

受け入れる価値のあるものなのです。火は明るく輝き、
神殿あるいは亜麻布を燃やしてしまうのです。

一すじの光が、ヒマラヤ杉の木切れや雑草から立ちのぼる

炎の中で踊っています。そして、愛は火なのです。

困っている私が、あなたを愛しています……よく聞いて下さい……

あなたを愛していますと語る時、あなたの目に映る私は

美しい姿に変わり、確かに輝いて見えることでしょう。それは私の顔から

あなたへと発している新たな一条の光を、意識しているからです。

最も卑しい愛でも、愛には低さはないのです。

なぜなら神は、神を愛する最も卑劣な人間でも

愛するうちは、受け入れて下さるからです。

私の感情は、今の醜い容貌を越えて、自ら光り輝き、

愛の大いなる働きが、いかに自然の働きを高めているかを示しているのです。

XI

そのために、たとえ愛することが味気ないものであっても

私の価値がすべてなくなる訳ではないのです。

あなたが目にする青白いほほ、

悲しみに沈み心の重荷に耐えられない 揺らいでしまう膝——

昔はアオルナスに登る力を与えられていたのに、

今は谷間でさえずる夜鳴鳥に反して、

物悲しい音楽をやつと奏でられるほどの　この疲れ果てた吟遊詩人の人生――
どうして、これらのことに触れるのですか？

おお、愛する人よ、私があなたの価値にも

地位にもふさわしくないのは明らかなこと。

それでも、あなたを愛しているために、

私はあの愛から　守ってくれるこの優しさを得て、

いつも愛のうちに生きて行こうとしているのです、でも出来ないのです――

あなたのために神の祝福を祈りつつも、あなたの顔をさけてしまうのです。

XII

本当に私の誇りであるこの真の愛、

この愛が、胸から額へと高まって来て

人目を引き、隠れた値打ちを示すため、とても大きなルビーとなって

私を飾るのです。――誠にこの愛、私のとても大切な愛でもって、

限りなく愛してはいけません、

はじめて　あなたのとでも真面目な視線が私の視線と交差して

愛が愛に応えた時に、あなたが私に示してくれた手本、

見せてくれた模範のことは別にして。ですから、

私には素晴らしいものとして　愛を語ることも出来ないのです。

あなたの魂は、私のまったく生気の失せた弱々しい魂を捕らえ、
黄金の玉座に座しているあなたのかたわらに置かれたのです。――

私の愛している魂は、(おお、魂よ、

私達は素直にならなくてはいけないのです！)

私がただ一人愛しているあなたの側にあるのです。

XIII

あなたは、私が十分に意を尽くす言葉を見つけ、

あなたに対して抱いているこの愛を語り、

風が吹き荒れている間に、松明を二人の顔の間にかかげ、

互いの顔に明かりを灯してほしいと思つているのですか？

私は松明をあなたの足元へ落としてしまうのです。

私には、自分の手で魂をはるか遠くに止めて置くような真似は出来ません。

私は、心の奥の手の届かない所に隠された愛の証を

言葉に出して語るべきなのです。

いいえ、そうではないのです。女性らしく黙つていますから、

女としての私の愛を、あなたの思いのままにして下さい。――

どんなに愛されても、私には応じられないことがわかつているのですから、

私の人生の衣を、要するに、

恐れず、黙して我慢強くはぎ取つて下さい、

この心に一触れして、深い悲しみを取り出さないようにして。

XIV

どうしても私を愛して下さるなら、ただ愛のためにして下さい。
こんなことは言わないで、

「僕があの人を愛するのは、微笑み、

顔立ち、物静かな話し方のため、——

考え方が私とよく似ているから。」

確かに、あの日 楽しいやすらぎの気分になれたから」と——
これらのものはそれ自体、愛する人よ、変えられてしまうし、
あなた次第で変わるもの——このような結果生まれた愛なら、
同じように崩れて行くもの。私のほほをふいてくれる

あなたの優しい哀れみで、愛するのはやめて、——長い間、

あなたのなぐさめを心に抱いてきた者は、泣くのをわすれて

あなたの愛を失うことになるかもしれないから！

ただ 愛のために私を愛して下さい。

いつまでも愛して下さい、愛の永遠を通して。

XV

お願いですから あなたの目の前で、あまりに物静かな悲しい顔の私をどうか責めないで下さい。

私達は二人とも 違った方向を見ているために、

同じ陽の光で、二人の顔と髪を照らすことは出来ないのです。

あなたは私を何の懸念も抱かずに見つめている、

まるでクリスタルグラスの中に閉じ込められた蜜蜂を眺めているかのように、

悲しみのため、私は愛の神聖さのうちにすっかり閉じ込められています、

そこで 仮に失敗を覚悟して、

羽を広げ空中を飛んだとしたらひどいことになるでしょう。

でも 私はあなたを見つめています——あなたのことを——

愛のほかに愛の終わりを見据えながら

思い出のかなたに忘却を聞きながら、

まるで川の遠くの無情な海を

高みから座って見つめる人のように。

XVI

しかもなお、あなたはこの通り征服したのですから、

あなたはとても気高く王者のような方ですから、私の数々の恐怖に打勝ち、あなたの紫衣を私にかけてくれるのです。すると、これからは、私の心とあなたの心は、とても親しくなり、一人で居る時に心が揺れるのもわからない程です。

ああ、征服は、君主に相應しく完全なもの、低いところにいる者を打ち碎き、高みへと引き上げてくれるのです。

そして、打ち負かされた兵士が、血に染まった大地から抱き上げてくれる者に、劍を差出すのと

まったく同じ様に、愛する人よ、ついに

私の戦いはここで終わると書き記します。

もしあなたが私を招いてくださるなら

私はすぐに恥を忍んで立ち上がります。

私の価値を高めるため、もつと愛して下さい。

XVII

私の詩人よ、あなたは神が過去と未来の間に

置かれたあらゆる調べに触れ、

澄みきった空気の中を清く流れる美しい調べを歌い、

あわただしい世の中に、よく聞かれる叫びを

素早く詩にすることが出来るのです。

あなたは、世の人のいともみじめな出来事に応えて、
癒してくれる音楽の解毒剤を、そこから
彼等の耳もとへ注ぎ込むことが出来るのです。

このような目的を果すため、

あなたには神の意志が注がれ 私はあなたに仕えるためにあるのです。
愛しい人よ、大いに役立つために、私を用いていただけませんか？
希望をあなたの側で楽しく歌うこと？ それとも 美しく悲しい思いを
あなたの歌の中に混ぜること？ しゅろや松の木陰で歌うこと？
歌をやめて休む墓？ どれか選んで下さい。

XVIII

最愛の人よ、私は一房の髪をあなたへあげるほかには、

男の方へあげたことはありません。今 指先で、思いにふけりながら
私は褐色の髪を 長さいっぱい巻いて、

「これを受け取って下さい」と述べたのです。

私の青春の日は、昨日のものとなりました。

私の髪は、小躍りに合せて、もう揺れたりはしないし、

私は少女達がするように、もうバラやテンニンカの小枝で

髪を飾ることもないのです。今では 髪は両方の青白いほほにかかり、
涙の跡をおおい隠すことが出来るだけ、

悲しむ癖のあるために、うなだれた首筋から衰えがわかるのです。

私は最初にこの髪を、死の大ばさみが切り取るものと思っていたのです、

しかし、愛はただしいものなのです——あなたはこの髪を受け取って下さる——

母が亡くなる時に、ここに残してくれた口づけは

長い年月の後も清いままでいることを知りながら。

XIX

この魂のリアルトで、取り引きが行なわれるのです。

私はあの市場で、髪と髪を交換し、

私の詩人の額から、私の心の中へ 大商船よりも価値のある

この髪の間を受け取るのです。

それは 昔 ピンダロスの目に、薄紫色の髪が

九人の色白のミュージズたちの額にかかり、黒々と見えたように、

紫色の黒髪をしています。この髪のために、

愛する人よ、月桂樹の冠の陰が、これから先も

あなたの髪にとどまっている気がするのです。

あなたの髪はとも黒いのです！ こうして、甘い口づけの香りのする髪紐で、

私は黒影が心の奥へ消えうせないように、しっかりと縛り、

何の邪魔も入らないところに、この賜物を置くのです。

あなたの額に置くように、私の心のこの場所に、

私の髪が、死んで冷たくなっても、自然の温もりが消えないように。

XX

愛する人よ、私の愛する人よ、

一年前この世界にあなたがいたことを思う時

幾度も私はこの雪の中に一人座り、

足跡一つ見ずに、あなたの声を一時も聞かずに

たちこめる静寂に耳傾けていたのです。

ただ 一環一環 私の鎖の全てを数えていたのです、

たとえあなたの手で一撃を加えても、決してはずれることのない鎖を。

——まあ、こうして 私は人生の偉大な驚異の杯を

飲みほすのです！ 素晴らしいこと、あなたが昼も夜も

人の行為や言葉に決して怯えないのは、——

あなたが眺めていた咲き誇る白い花々のために

先見の力をなくしてしまわないのは。

無神論者たちは、心鈍く

目に見えない神の実在は 考えられないのです。

XXI

私を愛していると繰り返して言つて下さい、さらにもう一度
繰り返して言つて下さい。たとえこの言葉が「カッコウの歌」のように
思えたとしても、心に留めておいて下さい、

あなたが丘や草原、谷や森に向つて、

愛していると言葉をかける時、カッコウの声が聞こえ

一面緑に覆われた新鮮な春が、訪れて来るのです。

愛する人よ、怪しい悪霊のささやく 暗闇の中で あお疑念の痛みの中で、

私は大きな声で叫ぶのです「もう一度言つて——君は最愛の人！」と。

空に輝く星が流れても 誰が星屑を恐れることがありません。

花がこの年を飾つても 誰が多くの花々を恐れることがありますか？

私を愛している、愛していると言つて下さい——

銀鈴のような声で繰り返して下さい！

愛する人よ、魂の底から静かに

愛することも 心に留めておいて。

XXII

私達二人の魂が まっすぐ力強く立ち、

互いに向き合い、黙して

近くより近く引き合い、長く伸びた翼が

継ぎ目のところで折れて 燃え上がるとき、

私達が長くここに満足してられない程

この世の人は何か恐ろしい事を 私達に働くのでしょうか？

考えてみて下さい。天使達は 高く舞い上がり、

二人のもとへ舞い降りて来て、完全な歌の黄金の宝珠を

私達の深く愛しい沈黙の中へ 落そうとします。

最愛なる人よ、むしろこの世にとどまりましょう——

この世の人の嫌な悪意のために

清い魂は追われ、孤立させられても

しばらくは立場を許してあげて 我慢して愛しましょう

闇や死の時でもって この世は取り囲まれているのですから。

XXIII

本当にそうかしら？ もし私がここで死んだら、

あなたは私の落とした命を 惜しんでくれるでしょうか？

そして 私の頭に降りる墓の湿り気のために、陽はあなたに対してさらに冷たい光を放つてでしょうか？

私の愛する人よ、あのように手紙に書かれたあなたの気持ちを讀んだ時

驚いてしまったのです。私はあなたのものです——

でもあなたにとって大切なものかしら？ 私の両手が震えているのに
どうしてあなたの葡萄酒を注ぐことが出来ましょう？ そこで私の魂は
死の夢を見るかわりに、生命の奥深い世界を取り戻すのです。
ですから 愛する人よ、私を愛して下さい！ 私を見つめて下さい
私のところで休んで下さい！ 賢い女性達が
愛のために土地や身分を投げうつのを何とも思わないように、
私もあなたのために 墓を譲り渡し、
私の親しくかぐわしい天国の光景と
取り替えるのです、あなたと一緒にいられるこの世のために。

XXIV

折りたたみナイフのような 世間の鋭さをそのまま閉じて、
今 柔らかく暖かいこの閉じた愛の手の中に
どんな害も加えないようにしましょう。ナイフをかちつと閉じて
人の争いの騒ぎを聞かないようにしましょう。命から命へ——愛する人よ、
私は何の不安もなく、あなたに寄り添い、
つまらない人達の中傷に対して 魔法にかげられ
守られているような安堵を覚えるのです。
彼等はたとえ多数だとしても 弱く傷つきやすいのです。
いつも純白な私達の人生の百合の花は、

豊かにしたたる天の露を取り入れて
根を養い 花を咲かせ
人の手の届かない 丘の上にまっすぐのびているのです。
私達を豊かに創られた神だけが
私達を貧しくすることが出来るのです。

XXV

愛する人よ、あなたのお顔を見るまでは、
年ごとに 重い心を携えていたのです。
すべての自然の喜びにかえて
悲しみが次から次へと沸き起こって来たのです、
軽やかに身に付けた真珠の首飾りが
舞踏の際に次々と 高鳴る胸に
揺れるかのように。希望は はやくも長い絶望にかわり、
神の恵みも わびしいこの世より
私の重い心を 取り上げられないほどになったのです。
その時 あなたは私に重い心を携えて来て
あなたの静かでおおきな存在の下へ
投ずるように命じられたのです。それは
自然と落ちて行くもののように 素早く沈んで行き、その間

あなたが上を覆い、星と未完の運命の仲立ちをしてくれたのです。

XXVI

何年も前には 私は人の代わりに数々の幻想を友として生きていたのです。

そして それらを愛しい仲間と思い、それらが私に演じてくれたものよりも、さらに甘美な音楽を、知ろうとは思わなかったのです。

しかし、すぐにそれらの裾をひきずるような紫衣では

この世の塵あくたから解放されず、

それらの奏でるリュートは、音を出さず、

それに 私自身もそれらの衰え行く瞳のもとで

気が遠く目が見えなくなつたのです。

その時 あなたが現われて——愛する人よ、

それらの幻想と見まちがえするものになつたのです。それらの輝く顔、歌、壮麗さ

(さらに良いもの、清められた聖水盤に入れられた川の水と同じようなもの)が

あなたに見られ、あなたから出て 私の魂を捕え 欠けているものを全て

満たしてくれるのです。なぜなら 神の賜物は

人の最高の幻想を恥ずべきものに交えてしまうからです。

XXVII

私の最愛の人よ、あなたは私が投げ入れられたこのわびしい味気ない世から、私を救い上げ、そして生氣のない巻き毛の中に、生の息吹を吹き込まれ、あなたの救いの口づけを受けるまえに、

額は全ての天使達が見ているかのように、

再び希望に満ちあふれ、明るく輝くのです。

私の人、私だけの人よ、あなたは世の人が立ち去ってしまった時、私のもとへやって来てくれるのです。

そして、神だけを探し求めていた私は、あなたを得たのです。

露に濡れないアスファデルの花の中に立つ人が

上流生活の中で送った退屈な時を、振り返って見るように、——

私も希望に胸をふくらませ、

ここで、善と悪の狭間で、

愛は死と同じように強く、

更に、生命を蘇らせてくれるものであることを証言するのです。

XXVIII

私の戴いた手紙！ まったく完全な、言葉で表わせない程の、純粹な手紙！

そしてなお、紐を解く震える手とは裏腹に、これらの手紙は、生き生きと躍動しているように見えるのです。そして今宵、私の隣に手紙を置かせて下さい。

この手紙の文面では——彼は一度だけ友達として

私に会いたいと望んでいたのです。これが決まると、春のある日にやって来て

私の手に触れたのです……純真なこと、でもそのために、私は涙を流したのです！——

この手紙……明るく輝いている手紙……では、最愛の人よ、

あなたを愛していますと書いてありました。それで私は

まるで神の未来が、私の過去を激しく打ったかのように、気が重くなり

消沈してしまつたのです。この手紙では、私はあなたのもとと書いてありました——

そして、そのインクが、激しく鼓動する私の心臓に淡くそまつたのです。

そしてこの手紙……おお、愛しき人よ、あなたの言葉は、ほとんど役に立たないのです、私がこの文面を繰り返し読んだところで！

XXIX

私はあなたのことを思っています！——

私の思いは、木にからまる野生のつる草のように、

あなたに巻きつき、芽吹き、広い葉を広げ

やがて木を覆い隠す、はびこる緑の葉のほかには何も見えないのです。

でも、おお、私のシュロの木よ、私はいとしく、優しく

あなたの他には誰も思わないことを、わかつて戴きたいのです！
むしろ、今すぐに、本来の自分を取り戻して下さい、
まるで力強い木がするように、あなたの大枝を揺すり
幹の葉を全て散らし、あなたを包む青葉の帯をどさりと下に落して下さい——
粉々にして、あたり一面にまき散らして下さい！ なぜなら
あなたの姿を見、あなたの声を聞き、あなたの影の中で
新鮮な空気を吸う、この深い喜びの中にしたつていと、
私はあなたのことを考えられなくなるのです——
あなたの側に居過ぎるからです。

XXX

私には、今宵、涙越しにあなたの姿が見えるのです、
そしてなお、今日、私にはあなたが微笑んでいるのが見えたのです。
そのわけをどう考えたらよいのでしょうか？——
愛する人よ、私を悲しくさせるのは、あなたそれとも私？
ミサ仕えは、詠唱の喜びと感謝の儀式のただなかで
顔を蒼白にさせて、祭壇のところで倒れてしまうかもしれません。
私はあなたの声と誓いの言葉を耳にしてあなたの姿が見えなくなると、
途方にくれ、呆然としてしまうのです。まるで聖歌隊の唱えるアーメンが
聞えなくなるミサ仕えのようにです。

最愛の人よ、あなたが愛してくれるから？ それとも 私が夢見たような
あらゆる栄光を目にして、魂の目にとって、あまりに強い光で
理想を膨らませ、気絶してしまったからですか？
今涙があふれ出て——熱く心からこぼれる時に
あの光は、再びやって来るのでしょうか？

XXXI

あなたがやって来る！ 全て無言のうちに語られるのです。

私はあなたの視線を浴びて座っているのです、

まるで子供達が真昼の陽を浴びながら、

表わせない豊かな内心の喜びのため

幸せなまぶたの奥に うち震える魂を抱いて座っているかのように。

じっと見詰めて下さい、私がこの前 あれほど疑ったのは誤りでした！

でも 私はその犯した罪を 深く後悔するのではなくて

その原因をくやんでいるのです——私達は二人とも しばらくは

互いの存在が慰めにならないことに、耐えなければなりません。

ああ そばに寄り添っていて下さい。優しいあなたは力を貸して下さい！

また 私の不安が頭をもたげる時あなたの大きな心で静かに鎮めて下さい、

あなたの清らかな大きな力で

空に寂しく捨てられた羽毛のまだはえそろわない小鳥のように、

不安が取り除かれる時に 揺れ動くこれらの思いを守って下さい。

XXXII

陽が昇り あなたが私に愛の誓いをたてられた最初の時に

私には、永遠の誓いを果すのに、あまり急ぎ過ぎているような気がして
これらの親しい関係を、弱めてくれるように月にお願ひしたのです。

性急に愛し合うのは、すぐに嫌になると思つたのです、

そして、自らを振り返つて見る時、

このように素晴らしい方の愛を受け入れるのに

相応しくない者に思えたのです！——

まるで調子はずれのこわれたピオル、

上手な歌い手は、自分の歌を駄目にしてしまうことを怒るでしょう、

でも急いでそれを取り上げ、初めの不快な音色のもとに

置かれるのです。私はさほど自分を傷つけたわけではなく、

あなたに悪い事をしてしまったのです。

名手の手にかかれれば、傷ついた楽器からも完全な調べが流れ出るのです——

そして偉大な魂をひと弾きで うっとりさせることが出来るのです。

XXXIII

ねえ 私を愛称で呼んで下さい！

子供の頃 無邪気な遊びをやめて走って来たり

キバナノクリンザクラの咲きほこる野原からもどって来たり

目の表情で、私をかわいがっているのがわかる人の顔を

覗きこんだりした時に、使っていた名前を私に聞かせて下さい。

私は澄んだ優しい声が、清らかな天国の音楽の中に吸い込まれ 調和し

もう二度と私を呼んでくれないのが寂しいのです。

棺の上は静まり、私は神に呼びかけるのです——神に呼びかけるのです！

ですから あなたの言葉で

今はなき人々の後を受けて呼んで下さい。

北の草花を摘み集め 南の草花を咲せてください、

若い頃の愛を取り上げて 最近の愛の中で育てて下さい。

ねえ 私をあの名前で呼んで下さい——そうすれば

私は本当に、前と変らない心で すぐに返事をしますから。

XXXIV

あなたが私を愛称で呼んで下さる時

亡き人々に答えたのと同じように、変わらない心で返事をしますと
私は言いました——見て下さい、この空しい約束を！

変らない約束、変らない約束も、人生の計略にかかり
惑わされ かき乱されてしまうものかしら？

昔 名前を呼ばれた時、急いで花を投げ捨て、あるいは
遊戯を止めて走って行って行き、遊びの終わりで浮かべたり

良い娘のうちは消えずにいた微笑みをたたえて、

返事をしたことを話しました。今 返事をする時 私は死の思いを投げ捨て
孤独を破り なおも私の心はあなたに向って行くのです——よく考えてみて——

たった一つの素晴らしいものの為ではなく、

私のあらゆる良きものの為なのです。

最愛の人よ、この上にあなたの手を載せて下さい、

子供のような足では、この血がめぐるように速く走れないことを許して下さい。

XXXV

もしも私があなたのために 全てを捨てたら

あなたは愛って 私の全てになつて下さいますか？

私は、家での語らい 祈り 互いに交わすなげない口づけが
なくなるのを寂しく思わないでしょうか、

私が目を上げて、この家とは別の新しい壁や床の家を

訪ねることを不思議に思わないでしょうか？

いやむしろ 変化に気づくにはあまりにうとい

生気の失せた目でふさがれている、私の周りのあの場所を

あなたは満たしてくれませんか？ それはとても難しいこと。

愛の征服に努力がいるなら、あきらかに悲しみの征服には

さらに努力がいるのです、なぜなら 悲しみはまさに愛であり

なおも悲しみであるからです。ああ 私はとても深く悲しんでいる為に

あなたを愛することは出来ません、でも私を愛して下さい——愛して下さいませぬ？

あなたの心を広く開けて、あなたの鳩のような濡れた羽で包みこんで下さい。

XXXVI

私達が初めて会い、そして愛した時、

私は大理石で、この出来事の上に家を築いたのではないのです。

悲しみと悲しみの間に宙づりにされた愛は、はたして持続していったでしょうか？

いや、むしろ 私は前に延びた小路を、黄金色に輝くように見えた光をすべて疑い、

震えおののき、一本の指でさえ折れ曲げるのを恐れていたのです。

そして 私は、あの時から心穏やかにになり、強くなりました、でも私には

神はなおも 新たな恐怖を抱いていたようにおもえるのです……

おお 愛よ、おお 真実よ、……

これらのしつかり握られた手が、いつまでもこのままでいないように、

かつてこの唇はつめたかつたのですから、
この互いの口づけは、認められないものとして 二人の間ではやめるように。
愛する人よ、裏切つて下さい！
例え一つの誓いを守るため

一つの喜びを失わなければならないとしても、予言された人生の星にかけて。

XXXVII

許して下さい、ああ 許して下さい、

私の心は、あなたについて知っている

全ての力強い神ごうしさの中から

うつろいやすく、嬢れやすいイメージしか描けなかったことを。

あの遠い昔の年月のため あなたの崇高さを受け入れず

一撃にたじろぎながら 私はくらむ頭で

世の人の疑惑や恐ろしさを耐え忍び

盲のように あなたの清い姿を見捨て

あなたの至上の愛を

価値のない模造品にゆがめてしまったのです、

あたかも難破した異教徒が、無事に港にたどり着き

彼の守護神をほめたたえるために

神殿の門の中で 彫刻されたイルカを供えて

えらを鳴らし、尾を震わせるようにです。

XXXVIII

彼が初めて私に口づけをしてくれた時

彼はただ私が詩を書くこの手の指に、してくれたのです、

それから、この手はさらにきれいに白くなり

世間の挨拶には、ゆつくりと

天使達が話している時には「まあ、聞いて下さい」とすばやく動いたのです。

あの初めの口づけよりも、私の目には、はっきり見える

二度めの口づけは、高まりの上で初めの口づけをしのぎ

額を求めて半ばそれ、半ば髪の上に触れました。

おお 償いに優るもの！ あれは、愛の聖油

神聖な甘美さをたたえたこの愛の冠が、優位を占めたのです。

三度目の口づけは、私の唇に触れ

しつかりと貴い形で重ね合わされたのです、

その時以来 本当に私は誇りを持つて

こう言ってきたのです「私の愛する人、私の人」と。

XXXIX

なぜなら あなたには(年月の雨に打たれて

これ程までに青ざめているのに)私のこの仮面の裏を見抜き

私の魂の真実の顔 人生の競走に呆然となり

疲れきった証人を見る力と雅量があるから――

なぜなら あなたには、この魂の狂える昏睡状態を通り抜けて

忍耐強い天使が、新しい天国に場所を捜し求めているのを

見抜く信念と愛があるから――

なぜなら 罪も悲しみもなく

神の裁きも 死の隣人もなく

他人を見て迷うこともなく

自己を見て すべてが嫌になることもなく

あなたを拒むものは何もないから……

愛しい人よ、あなたがするように 感謝の念を表わすすべを

私に教えて下さい、何て素晴らしいことでしょう!

XL

おお そうなのです! 世の人々は、私達のこの全世界のおかげで

愛し会っているのです！ 私は、いかにも愛と呼ばれている愛を否定はしません。

私は、若い頃 愛がつぶやかれるのを聞きました、
それ程前のことではなく 今もなお

あの時に摘み取られた花が、香りを放っているのです、

回教徒や異教徒達は、微笑んでカーチフを投げ合い
嘆き悲しんでいる者に無慈悲なのです。

一つ巨人ポリーリーフィーの白い歯は、雨がよく降った後

穀がすべすべしてしまい 木の実をかんでも滑ってしまうのです――

そして 愛と呼ばれるものにも変わるのではなく
憎しみにあるいは忘却へと変わってしまうのです。

でも あなたはこのような恋人ではないのです、

最愛の人よ！ あなたは悲しみや病の間待って下さり

魂の触れ合いをもたらし 他の人々が「あまりにも遅すぎる」と叫ぶ時 早いと思ってくれるのです。

XLI

私は感謝と愛をこめて 心から私を愛してくれた人々に感謝したいのです、
市場や寺院の仕事へ向う前に

仕事を忘れ 良く響く私の音楽を聞こうとして

監獄のような壁の近くで 暫く休んでいた

全ての人々に感謝をささげたいのです。

しかし 私の声が低く元氣なくすすり泣いていると
あなたは、自分の最も神聖な芸術を

あなたの足もとに投げ出して

涙が流れる間 私と言ったことに

耳傾けてくださったのです……

あなたに感謝する方法を教えてください、

ああ 私の魂を十分意義あるものにして未来へ渡すために

人はそれを言葉で表し 消えうせてしまう人生から

消えないで続く愛に 敬意を表わすべきなのです。

XLII

「私の未来は、私の過去を美しく映し出すことはないでしょう」と
私がかつてこう書きました、

哀願する様なまなざしを 神の純白な御座の方に投げかけて

この言葉の正しさを示してくれた 私のかたわらの

生命の救いの天使を思いつつ振り向いてみると そこには

あなたの魂の天使達と違わない あなたの姿が見えたのです。

そこで 長い間 生まれながらの病気に苦しんでいた私は

しつかりとこの慰めを受け取ったのです。

あなたを見ると 私の巡礼の杖に芽が吹き

真珠の玉のような朝露の光る青葉が 出てきたのです、
私は今 前半生を映して見る気は有りません、
長い間 見つめてきた書物をここにまらめて
私のために 新たに始まる未来のための金石文を書いて下さい、
私の新たな天使よ、この世界では思ってもよらないものを！

XLIII

どんなにあなたを愛していることでしょうか？ その愛し方を数えてみましょう。
人目に触れないところで 神と神の完全な恵みの極地を捜し求める時のように
私の魂の達する限りの深さ、広さ、高さまであなたを愛しています、
太陽やろうそくのあかりのように
日々のとても静かななくてはならないものの程度まで あなたを愛しています。
人が正義を求めて戦うように 自由にあなたを愛しています。
人が賛辞から顔をそむけるように 真心からあなたを愛しています。
私が昔の悲しい時に 發揮したあの情熱と私が子供の頃いだいていた信仰をもって
あなたを愛しています。
私のなくした聖者とともに
失ってしまったかに思える愛の心をもって あなたを愛しています。
—— 私の全生涯の呼吸と微笑と涙をもってあなたを愛しています ——
そしてもし神が お許しになるならば、

死んだ後もいつそうあなたを愛します。

XLIV

愛する人よ、あなたは私に庭で摘んだ多くの花を持って来てくれました。

夏の間も冬の間も それらはまるでこの閉された部屋で咲き

太陽や雨がないのを寂しく思わないかのように見えました。

そこで 私達の等しい愛にかけて、ここでまた開き、

暑い日や寒い日に 私が心の庭から除いたこれらの思いを引き取って下さい、

実に これらの花壇や木陰には、

雑草やヘンルーダがはびこり

そこであなたが除いてくれるのを待っているのです。

なお ここには 野バラ、ここにはつたがはえているのです！

私があなたの花にしたように

それらを取って決して悲しまないところに置いて下さい、

それらの色があせないようにいつくしんで下さい、

そして それらの根はわたしの心の中に

張っていることをあなたの魂に告げてください。